

派遣者番号	31K07	氏名	高橋 晶子
研究主題 —副主題—	図画工作科の新学習指導要領における三つの資質・能力から考えるカリキュラム・デザイン —回転版画技法による表現の研究—		
派遣先	東京学芸大学 教職大学院	担当教官	西村 徳行
所属	港区立赤坂小学校	所属長	齋藤 恵

キーワード：図画工作科 育成を目指す資質・能力 オーダーメイド・カリキュラム 可視化

1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

新しい学力観や新学習指導要領(以下、平成29年版)の「育成を目指す資質・能力の三つの柱」による教科観の変化に合わせ、図画工作科の専科教員(以下、図工専科)として、教科の特性を理解し適切な指導・助言する必要性を感じている。今回の改訂の特徴を押さえ、現場の実情に合わせた汎用性の高いカリキュラム・デザインの方法を提案することが本研究の目的である。

2 研究の内容・研究の方法

(1) 先行研究

図画工作科における育てたい資質・能力とカリキュラムについて、平成29年版の趣旨と特徴について捉える。加えて、図画工作科の学力観の変遷と、諸外国の実践例等を検証し、今後求められるカリキュラム・デザインがもつ可能性の根拠とした。

(2) アンケート調査

現場のカリキュラム・マネジメントの実態を把握するために、経験や指導内容への意識、カリキュラムの見直し等について、東京都の図工専科を中心とした121名の教員を対象にアンケートを行った。

結果を基に、傾向や経験による差異について分析・考察し、カリキュラムをつくる際の課題を明らかにすることで、汎用性の高いカリキュラム・デザインを提案するための資料とした。

調査項目は、以下の四点とした。

- ① 指導計画を立てる際の拠り所
- ② 新学習指導要領の重点内容への意識
- ③ 資質・能力の三つの柱への意識
- ④ 指導計画を見直す意識と頻度

(3) 課題に対するカリキュラム・デザイン提案

これからの学力観やアンケート結果の傾向から、課題に対応するためのカリキュラム・デザインの方法を提案した。自身の実践を例にして検証したり、授業案を示したりすることで「資質・能力」の育成を目指す指導計画のイメージを示すこととした。

3 研究の結果

(1) 新しい学力観と改善のポイント

平成29年版は、教育の世界的指針 OECD「Education2030」に呼応した形で出された中央教育審議会答申(2016)の内容に対して学校教育がどう応えるか示したものである。その中で「カリキュラム・マネジメント」と「資質・能力」が今回の改訂のキーワードとなっている点に注目して図画工作科の視点から検証した結果が以下のとおりである。

- ・ これまでの美術教育の理念は引き継がれながらも、他教科と同様に「育成を目指す資質・能力」の三つの柱である「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」で整理されたことで、「コンテンツ・ベース」から「コンピテンシー・ベース」に舵を切る。
 - ・ 子供や学校の実態を踏まえて教育の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の考え方を用いて、「レディメイド・カリキュラム」から「オーダーメイド・カリキュラム」へ移行していく。
- そのために求められるのが教員のカリキュラム・デザインの能力である。実際のカリキュラム・マネジメントの傾向を明らかにすることで、OJTも視野に新しい学力観に対応することができる。

(2) カリキュラム・アンケートの結果・考察

図1は、調査項目①指導計画を立てる際に参考にしてしている対象についての集計結果である。

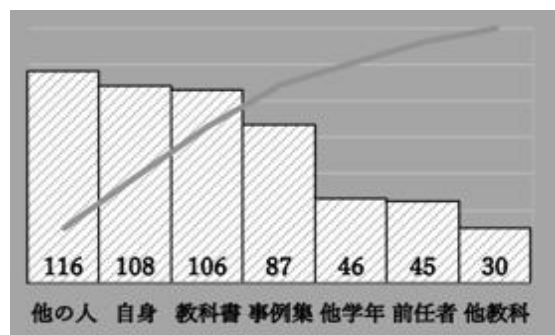


図1 年間計画の参考対象順

【事例集】を境に、【教科書】、【自身の実践】、【他人の実践】を参考にしている割合が高く、【前任者】、【他教科】、【他学年】に関しては低くなる。

しかし、経験年数1～4年目までの若手(33名)と5年目以上(88名)に分けて比較してみると、ベテランほど【自身の実践】を参考にする割合が高く、若手は【前任者の計画】を参考にする割合が高い傾向が見られ、両者には有意差が見られた。

また、調査項目②重点内容への意識では【自身の実践】を参考にしている人ほど【教科横断的な内容】への意識が高いという相関関係が見られた。

さらに、調査項目③資質・能力の三つの柱と調査項目④年間計画の見直しへの意識の高さにも相関関係が見られた。

以上の分析から、【自身の実践】を参考にして年間計画を立てる人は、改訂内容やカリキュラム見直しへの意識も高いと言える。

参考にされる割合の高い【自身の実践】【他人の実践】を基に改訂内容を意識して指導計画を立てるためには、【資質・能力】と相対しやすく、学びの全容を壮観しやすく、見直ししやすいマネジメント方法が必要であることが見えてきた。

4 研究の考察

アンケート分析からカリキュラムの見直しへの意識が高い人ほど、資質・能力の三つの柱への意識も高く、経験を経ると【教科書等】のレディメイド・カリキュラムだけでなく、【自身や他人の実践】等を参考にカリキュラム・デザインをする傾向が見られた。そこで、個人的な偏りを見直し、バランスを相関する方策が必要であると考えた。

考察を受け、カリキュラム・マネジメントを効果的に行うための「可視化の方法」を提案した。カリキュラムの計画時や改善時に整理しやすくする方法として、「可視化」を図る「本棚式整理術」を考案した。(図2)

【現行の題材のイメージ】 【資質・能力の3つの柱の帯】

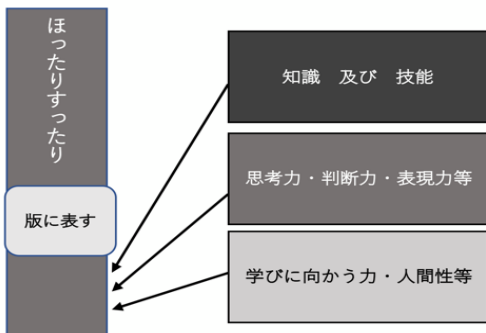


図2 「本棚式整理術」のイメージ

年間計画を本棚に見立て、「授業内容」を本の中身に例えた場合、背表紙に「題材名」、識別番号に「活動内容の系統」を示し、主とする育成を目指す資質・能力の三つの柱の帯をかけるというものである。資質・能力と相対させた題材(本)を、並べて相関することで、偏りやバランスを可視化する効果をねらっている。

また、本棚というイメージを活用することは、児童の実態や他学年、外部機関との関連等による変更「並べ替え」や「差し替え」という考えで対応しやすいという利点がある。この方法によって【自身の実践】等を参考にする際も、バランスのよいカリキュラム・マネジメントができるようになる。

さらに「本棚式整理術」と「内容系統表」を合わせて作成した表を考案し、全体のバランスを把握しやすくした。小学校第2学年で行った実践をモデルにして具体的に示した。(図3)

図3 「第二学年の題材系統表と三つの柱」

改善の必要に応じて資質・能力から授業を考えるということが必要となることから「版に表す」活動を例に授業を提案した。

5 今後の展開

現場の実践を、「内容」、「系統」、「資質・能力」の視点から整理し、可視化することでバランスを改善できるカリキュラム・デザインのマネジメント方法を提唱できた。

しかし、調査対象の多くが東京都の図工専科であるため、今回のアンケートから考察した内容では、全ての教員に対して方策になるということとはできない。今後は現場で実際に活用し、オーダーメイド・カリキュラムへの移行に伴い、主観性と客観性の両面から検証していく必要がある。

また、他教科や他校種との学びの連続性を相関することにまで利用できるかの検討も引き続き行いたいと考えている。